

2024. 12. 8 (日) 使徒20:28~32

20:28 あなたがたは自分自身と群れの全体に気を配りなさい。神がご自分の血をもって買取られた神の教会を牧させるために、聖霊はあなたがたを群れの監督にお立てになったのです。

20:29 私は知っています。私が去った後、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、容赦なく群れを荒らし回ります。

20:30 また、あなたがた自身の中からも、いろいろと曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こってくるでしょう。

20:31 ですから、私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがた一人ひとりを訓戒し続けてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。

20:32 今私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができますのです。

<説教>

ミレトスでの、パウロによる、エペソの教会の長老たちへの最後の勧告、別れの説教が続きます。これからも自分が行く先々で鎖と苦しみが自分を待っているとの聖霊の証しをパウロは聞いていました(23)。〈鎖と苦しみ〉は、彼が〈主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務〉(24)のゆえに捕らえられ、投獄され、苦しみを受けるという困難です。しかしパウロは、この主イエスから受けた任務を全うできるなら、自分のいのちは少しも惜しいと思わないとはっきりと告白しました(24)。それは神の御子イエスご自身が人となってこの地上に生まれてくださり、その十字架の死、復活、昇天という全生涯を通して、父なる神から受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うして下さったからでした。主イエスがパウロのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと模範を残されたからでした。パウロと同じ使徒ペテロは言いました。「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。あなたがたは羊のようにさまよっていた。しかし今や、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰った」(Iペテロ 2:21-25)と。それでパウロは自分が主イエスから受けた任務として、神のご計画のすべてを、余すところなくエペソで伝え、教えました(27)。そうやって、神と人に対する責任を果たしました。

さてパウロは、今振り返って見て来たようなことをただ自分のために告白し、宣言したわけではありません。それは今後、パウロがいなくなった後のエペソの教会の長老たちのためでした。彼らにも〈主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務〉(24)がありました。それでパウロは言いました。その任務を全うするために必要なこと注意すべきこと、知っておくべきことをパウロは知らせました(28)。ここでパウロが言う〈あなたがた〉

〈自分自身〉とは、パウロが語った〈神の恵みの福音〉、〈神のご計画のすべて〉を聞いた自分です。自分自身が自分を捨てて福音を素直に受け入れているか。自分の心の隅々にまで福音の声、神のみことばが届いているか。自分が福音を喜び、感謝し、神に従おうと心から願い、最善を尽くしているか。そんな自己吟味が第一に必要でした。更に自分のことだけでなく、他の人のことも顧みる必要がありました。〈群れの全体〉とともに、その中の〈一人ひとり〉(31)に気を配る必要がありました。〈群れ〉とは〈神の教会〉のことです。なお、〈牧させる〉とあるように、「神の教会・集会(エクレーシア)」は旧約聖書以来、羊の群れに例えられていました(先に見たペテロの手紙でもそうでした)。それで主イエスはご自分のことを、「羊たちのために自分のいのちを捨て、羊たちに永遠のいのちを与える良い牧者」と言われました(ヨハネ 10 章)。そして使徒ペテロには「わたしの子羊を飼いなさい」、「わたしの羊を牧しなさい」、「わたしの羊を飼いなさい」とお命じになりました(ヨハネ 21 章)。イエスの羊たちを飼う任務をイエスの御霊、〈聖霊〉によって与えられたのが長老たち、〈群れの監督〉でした。「飼う」ということは「支配する」ことではなく、「育てる、面倒を見る」ことです。牧草のあるところに羊たちを連れて行って十分に食べさせ、健康であるように、病気になつたりしないように気をつけることです。つまり〈神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰〉を、〈神の恵みの福音〉を証しし、知らせ、教えることで人々に良い霊的な糧を与えるのです。〈群れの監督〉はそうしなければなりません。なぜなら〈神の教会〉は〈神がご自分の血をもって買い取られた〉ものだからです。ここで言う〈ご自分の〉とは「ご自身のものであるお方」という意味で、それはつまり主イエスのことです。神の御子、主イエス・キリストの「いのちである血の代価」のゆえに〈神の教会〉〈群れ〉は、神の目に「高価で尊(たつと)い」のです(cf.イザヤ 43:4)。

それゆえ、この群れを、群れの内外から襲う悪魔の攻撃から守らなければなりません。そのために〈目を覚ましていなさい〉とパウロは警告し、命じました(29-31)。狼が羊の群れを荒らすという警告も主イエスが弟子たちに教えていたことでした(ヨハネ 10:12)。またマタイ 7:15 では偽預言者たちのことを「羊の衣を着た貪欲な狼」と言っておられます。パウロもそれは〈凶暴〉で〈容赦ない〉と警告します。イエスの牧場の羊のふりをして入って来るので実に「たちが悪い」。よくよく気を付けなければなりません(キリスト教を名乗る異端などはまさにそれです)。そして狼は外からだけでなく、〈あなたがた自身の中からも〉、教会の中からも起こると警告しました。それは先の「自分自身に気を付けよ」との警告を無視し、〈神の教会〉を「自分の教会」として自分の貪欲で支配しようとする者、〈弟子たちを(神のほうにではなく)自分のほうに引き込もうとする者たち〉です。パウロは決してそうはしてこなかったこと、むしろその正反対だったことを思い起こさせようとしていました。「目を覚ましていなさい」とは、これも主イエスが度々弟子たちに警告なさっていたことでした(マタイ 24:42。マルコ 13:33,35)。また「目を覚ましてい」ということは祈ること(マタイ 26:40)、また主に忠実であること(ルカ 12:37)と深く関わっていることも教えておられました。

そして、その覚めた目をもって、祈りをもって、忠実さをもってどこに向けるべきか。それは〈神とその恵みのみことば〉でした(32)。パウロ自身がこれまで自分を〈神とその恵みのみことばにゆだね〉て主に仕え、〈成長させ〉られ、〈御国を受け継がせ〉ていた

だく者とされていました。そしてパウロがいたときも彼らは〈神とその恵みのみことば〉によって養われていました。しかし確かにパウロと直接会うことがなくなる今後は、ますます、いっそう〈神とその恵みのみことば〉に向き合い、養われ、支えられて成長するようにパウロは言ったのです。〈成長〉とは〈神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達する〉(エペソ 4:13) こと、〈もはや子どもではなく、人の悪巧みや人を欺く悪賢い策略から出た、どんな教えの風にも、吹き回されたり、もてあそばれたりすることがなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において、かしらであるキリストに向かって成長する〉(同 4:14-15) ことです。これは〈自分自身〉と〈群れの全体〉のどちらにとってももの〈成長〉ですが、エペソ書でも「私たちはみな」とパウロが言っているようにキリストのからだなる〈神の教会〉の目指すところです。〈あなたがた〉(私たち)が〈御国を受け継がせ〉ていただくのは〈聖なるものとされたすべての人々とともに〉なのですから。

目を覚まして、祈り、聖霊に導かれて、〈神とその恵みのみことば〉、主イエス・キリストに目を向け、耳を傾け、聞き従っていききたいと心から願います。